

## 色彩動物

岐阜清流中学校 2年 佐藤 百合香

とある研究所に、一匹の動物がやってきた。見た目は猫と犬とコケ玉をたして三で割ったような形の、灰色の獣だ。そしてこの生物は全くの新種であり、未知であった。

この生き物は、食べた物の色に染まるという特徴を持っている。仕組みは全くわからない。だからこその研究施設で極秘に実験が進められることとなった。

ある日、実験体にレモンを与えた。生き物がそれを食すと、毛の色が一瞬にして黄色に染まった。それはまるで風になびくすすきのようで美しかったという。キャベツを与えた時は、艶のある緑になった。研究者たちは、この生物に「カラー」と「イート」を合わせた「カラット」という名前をつけた。

数週間後、普段通り若い研究員がカラットに餌をあげ、カラットはそれを食べた。研究員が飼育室から出たあとに、鞆を部屋に忘れたことに気づいた。慌てて研究員が戻った時、部屋に鞆は無かった。首を傾げる研究員の前を、カラットが横切る。思わず絶句した。何かを証明するように、カラットの毛色は牛革のような焦げ茶になっていたのである。

「お前、カバンを食ったのか？」

鳴かない獣は、返事の代わりに喉仏をゆったりと上下させた。

それから実験は相当進んだ。

カラットは、食物でないものさえも食べてしまうのである。そして食べたあともケロツとしている。カラットについての知識は増えていくのに、未だ何も分かることはさほど無かった。そのうえ、カラットは日に日に成長している。見ないうちにひとまわり大きくなり、飼育ケージは通用しなくなった。部屋を脱走することもしばしばで、大型犬といい勝負のカラットを誰もが疎ましく思うようになった。

唯一カラットについて解ったことは、色を欲するということだけ。

何でもかんでも食べるくせに、カラットは別の色へと変わろうとする。なにか医学的な理由があるのだろうか。それとも人間と同じように、自分だけの色に染まりたいと思っ

ているのだろうか。何者かになりきりたいと思うことがあるのだろうか。

そして突然、恐れていたことが起こった。カラットが人を傷つけたのだ。ケージを破壊し、脱走しようとしたカラットを捕まえた研究員の腕に噛み付いたのである。幸い、怪我は無かったらしいが、「絶対に破れない」と豪語しているオレンジ色の研究員が見事に噛みちぎられたために、カラットは一発で危険動物扱いになった。しかも被害者が研究所内で結構な権力を持っていたせいで、カラットは殺処分されることになった。

「お前は何も悪くない。こんな所に閉じこめられて、怖かつたんだよな。」

昔からカラットの世話をしていた若い研究員は、服を食い破るオレンジ色の獣に、そう語りかけた。

ある晩、研究員は断末魔の叫びを聞いてはね起きた。明日はカラットの処分の日であり、多くの者が監視役として寝泊まりしていたのだが。急いで悲鳴の聞こえた方へ向かうと、そこは大変な有様だった。布団は引き裂かれ、壁や床に血潮が飛び散っている。そして、この部屋で寝ていたはずの三人が消えていた。その中には以前、カラットに腕を噛まれたかたという例の男もいたはずなのに。

「カラットだ……。アイツが人間に復讐してるんだ」

一緒に様子を見に来ていた初老の研究者がそう呟くと、周りの人間達もざわざわと不吉なことを言い出した。

一人、若い研究員は飼育部屋に走った。案の定、ケージの中にカラットの姿はなかった。背中に唸り声を聞き、震えながら振り返った先にカラットを見つけた。部屋の隅に、それはうずくまっていた。もう、保護した頃のマリモを思わせる風体は消えている。暗闇の中で血走らせた眼球の中、瞳孔がパツクリと開いていた。

しかし、その姿を目にとめた研究員は、安堵の息を吐き出した。それからカラットに近寄ると、腕を伸ばし、首を抱いた。

「おい、何をやってる！ そいつは人喰いの化け物だぞ」

他の人たちの怒鳴り声を聴きながら、若い研究員は言った。

「安心してください。犯人はカラットじゃないです。だってあの三人を食べたなら、カラットはオレンジ色になってるはずでしょ？」以前の傷害事件のときもそうでした」

“その事実”に気づいた研究者達は、顔面を蒼白させ、後退りする。その様子を見ていた若い研究員だけは不思議そうに続けた。

「何故怖がるんです？ オレンジとは似ても似つかない色ですよ。だってこの子は、カラットは、こんなにも赤いじゃないですか」

狂ったように頬ずりをされている真っ赤な獣は、ようやく気に入った色を見つけたと言わんばかりに、ゆつたりと喉を上下させた。